

## 横浜ダンスコレクション 2020 コンペティション II 新人振付家部門 総評

今年は例年になく、各作品が多様であった。各作家の表現方法、その作品にかける思いなどが直接的に作品に反映された結果だと思う。そのくらい素直に、真摯にダンスと作品と、そして社会と自分とに向き合って創作し、踊ったのだと思う。

「ダンスとは何か？」

再び大きな問いとして私の目の前に現れたコンペでもあった。皆にとって「ダンス」は1つのツールでその捉え方や扱い方がそれぞれ全く違うのが面白い。ダンスの多様性を再認識できた。最優秀新人賞を受賞した橋本ロマンス『サイクロン・クロニクル』には何か面白いことが起こりそうな予兆がふんだんに盛り込まれていた。構成の仕方、シーンの見せ方、照明の使い方などが独特で、たくさん勉強してるのだと思う。スゴい。彼女の世界観にどっぷり浸かりたい。大きなお世話だろうが、彼女の存在が今後のダンス界をかき混ぜてくれるのでは？とも期待してしまう。来年の公演が楽しみだ。

奨励賞の山下恵美『互いに交わることのない、いくつかの』にも驚かされた。決して新しい手法でない創作方法だが、舞台表現の原点とも言うべき体験をした。感動した。表現としてのダンスの在り方に対する問いもあった。再び、ダンスの多様性に感嘆する。

ベストダンサー賞のヤマグチリオ、NISHIMURA KAIYA らのエネルギーからは、ダンスは感じるものだ、というメッセージを受け取った。

全身全霊で作品をつくって踊ってくれたこと、そしてその場に同席し体験できたことを、今回参加した全作家に心から感謝したい。ダンスの今後が益々楽しみだ。

伊藤千枝子

ダンスに限らず、舞台作品を見たときに「良くわからなかった」という感想を耳にすることがある。どうやら褒めてはなさそうだ。作品は「わかりやすい」ことが是、もしくは面白いとされているのかもしれない。でも個人的には「わからない」ものにも強く惹かれる。もちろん観客に向き合っていない、伝えようと努力していない作品はダメだが「良くわからないけど、エネルギーに溢れている」作品は、本当に魅力的だ。今回受賞した振付家たちが生み出したものは、踊ること、作品を創ること、他者に向き合うことへの欲求に溢れていたように感じる。そしてそれは、まっすぐに観客へと届いていたはずだ。

踊りや選曲のうまさ、構成力の高さと言った作品を整える力も重要だが、それはきっと経験を重ねることで身につくだろう。「若手」と謳っているコンペティション II だからこそ、荒削りでも力強いものに出逢いたいと思う。

コンペティションのために作品を整えるのではなく、「踊りたい！創りたい！観客と出逢いたい！」という強い思いからポロツと生まれでた何かを、ぶつけて欲しいと思う。それを磨くた

めの時間は、まだまだ充分にあるのだから。

加藤弓奈

今年のコンペティションIIのファイナリストたちは、少々お行儀が良すぎる嫌いがあったようだ。抗うことのできない沸き立つ踊りへのリビドーを持つ二人のダンサーにはベストダンサー賞を。日常会話における言語と身体に備わる身振り、男女間の関係性、世界とセカイ、様々なものが同居するリビング空間だが、そこでは決して交わることのない様々な次元の共存を視覚化、いわば不可能性の現前、もしくは現前する中に内包する不可能性を見せた山下恵実には奨励賞を。

そして、ひとつの舞台を綿密に解体し、それをもう一度様々なコンテクストで持って掘り下げていき、再構築していった現代的なモダニズム手法。言語は一見クラブシーンやファッションといった表層的なポップカルチャーの様相を呈するが、自己批評的かつ自己言及的な姿勢を持つ橋本ロマンスには最優秀新人賞を与えた。自身を構成する文学体験や視覚の記憶を地平に据え、舞台を解体すると同時に自身を解体し断片を陳列していくような知的ゲームのような作風。解体と構築が同時に行われ、しかも様々なスケールで展開。ポップであるが、とても責任の所在というものも意識しているようにも見える。勝手にヴィヴィアン佐藤賞を与えたい。今後が大変期待される。

ヴィヴィアン佐藤

近年ではもっともバラエティーに富んだ作品が並んだのではないか。そのなかでも橋本ロマンス『サイクロン・クロニクル』は抜群の面白さだった。空間構成や衣裳に至るまで独自の美意識で貫かれていて、もっとこの先を見たいと強く思わせた。審査会ではベンゴレア&シェニョーの名前が出たが、そういうビザールな魅力にも満ちている。山下恵実『互いに交わることのない、いくつかの』は演劇からのアプローチ。作品が映像選考時から大きく深化していたことにも驚かされた。言葉と身体との関係をさらに追求して欲しい。ヤマグチリオ『Little Love』とNISHIMURA KAIYA『NO ONE KNOWS ME』はストリートダンスからの応答。前者のエネルギーの炸裂、後者の緻密かつ禁欲的な表現は印象的。木村素子『MATE』は職人的なまでに巧みな構成力が光った。

今回も「こうすればコンテンポラリーダンス的に見える」という発想で動きや構成を組み立てていると思いき作品が散見された。そういう「定型」に捕らわれることなく、むしろ積極的に破壊することを恐れない作り手に出てきてほしいと思う。

浜野文雄